

ジョイス・オーツの *The Wheel* における「或る夫婦像」

長岡成幸*

A Tragic Couple in J. C. Oates's *The Wheel of Love*

Shigeyuki NAGAOKA

In this interpretative study of Joyce Carol Oates's "Convalescing" in *The Wheel of Love* (1970), the theme of love, style and structure of the story are discussed concretely in detail. As to the form of love, adultery and its tragic conclusion are also the central themes here. The love of a young couple is doomed considering their lonely and tragic situation. The adultery of a wife and the serious injury and convalescence of a husband are the themes of this story. But these must be just an impetus for the couple to face reality. At the end of the story, this active and frustrated woman made a promise to accept everything and care for her husband, but she will do it just in her own way. She never apologizes him and both of them never refer to her confession again. He must depend on her for everything forever. Similar tragedies of love in *The Wheel* are discussed in the previous study.¹ In the last stage of this series of interpretative studies, the central theme and structure of *The Wheel of Love* will be discussed as a whole. Prof. Waller places Oates's mode along Lawrence. His "settings and character" theory is very instructive and an important viewpoint when we review the book as a whole.

1. 初めに

オーツの短編小説集 *The Wheel of Love* (1970) に収録された24の作品の中から“Convalescing”² (『回復期』)という作品を選び、そのテーマや作風を考察し、これ以外の収録作品の理解、解釈の一助としたい。この短編集には、思春期の男女関係、夫婦関係、親子関係、聖職者と世俗の者などいろいろな人間模様を描いた作品が収録されている。その個々の作品をテーマと手法の面から考察し、作品間の比較を行いつつ、最終的には、この短編集全体の解釈、構成などを考察すべく、基礎的な検討を重ねている。ここでは、“Convalescing”を取り上げ、ストーリーの解釈を通して、テーマと手法を検討する。また、特にその技法が効果的であるかを検討する。

2. 物語のあらすじ

この話は、交通事故で大怪我を負い、記憶喪失に陥った主人公デービットが病院を退院し、家庭に戻り、妻と一人娘のいる家庭の夫そして父としての自分の座を取り戻して行く場面を描写している。ストーリーは4部構成であり、その構成と内容は次のとおりである。I) 退院後の自宅である日一市場調査員の訪問と娘と妻の帰宅、II) 交通事故の状況、III) 怪我、記憶喪失からの回復、IV) 友人達との会話一という4部構成で語られるが、テーマは交通事故を通しての妻の不倫とその夫婦関係である。従って、物語の全てのことに妻エレヌの存在が関係してくる。この事故は妻の不倫の発覚後、二日目の出来事となっているが、それが直接の原因であることには特に触れられず、むしろ完全にではないが、ほぼ失われ

た記憶喪失からの回復と夫婦関係に重点を置いて、物語が描写されていく。具体的には、主人公の過去の夫婦関係が思い出され、妻の不貞の発覚場面が浮かび、そして今現在の夫婦関係から未来の夫婦関係が暗示される。

3. 交通事故

この作品の骨格を成す交通事故の状況や経緯はそれほど詳細には描写されない。理由は、当然事故の詳細そのものはそれ自体事実であり、どれ程描写しても、それ程重要性をもたないからである。描かれるのは、今の病院での回復期に思い出された断片的な記憶に過ぎない。事実関係は最小に、且つ意識、無意識の中で心に掛ることを中心として描写される。デービット自身、今でも事故直後、車内に放置された20分間は全く覚えていない。事故は通り慣れた帰宅途中の高速道路の別れのコーナーで起きた。デービットの黒い車に対して別の青い、フィンの付いた車が高速で急接近して来て、接触し、スピンして壁に何度かぶつかり車は2台とも大破し、炎上した。相手は即死だった。デービットは頭蓋骨陥没、同骨折、肋骨骨折、裂傷多数で、瀕死の状態であった。当時も、事故が起こったことは分かったがそれ以外何も覚えていない。事故現場X地点の目撃者はいなかった。恐らくは、デービットが「え、何で車が？」と驚いた時点からは全てが“fiction”であり、警察による事故の調査自体も推測で書かれたものであった。

The planet flowed, the minute hand on the Goodyear Tire clock made its determined leap, a black car and a blue car swept together with a

*東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科

terrible grace as if decades of planning had led them to this impact, two minor threads in a mad, brilliant tapestry come together at last for a trivial climax. The car slammed together, side to side, they shook, shuddered, gave way, came apart... and then what happened? (pp.88-9)

このように、まるで計算されたかのように2台の車が一点で接触する。運命的な出会いであったと描写されている。この車の中に放置された20分間が過去とのつながりを遮断した。正確には病院での回復期が入るであろうが、この事故がデービットの過去と未来を遮断した。この物語は、主人公が自宅に戻り、庭で芝生に水やりをしているところに、男女のペアの市場調査員がアンケートに訪れる場面で始まるのであるが、実際にはこの事故がこの物語の出発点である。事故が夫婦の転機となるのが通例であり、好転もあれば悪いほうに転ぶこともあるが、この物語は再度不幸な出来事を思い出す出発点となる。徐々に自分を取り戻しつつあるデービットであるが、最大のポイントは妻との関係である。記憶を取り戻しつつある時に、妻の不倫の告白の日のことが思い出される。病院で初めて自分の妻という女性を見た時に不吉な予感がしたとデービットは感じていた。物語の中では、一度も「事故はお前のせいだ。」とは言葉も、暗示もされないことが却って、妻と夫との立場に緊張感を生む作用となっていて、効果的である。

4. エレーンとの夫婦関係

デービットの記憶から徐々に思い出されてきた妻のエレーンとの結婚、夫婦関係を見てよう。病院から帰宅したある日、芝生に水をやっていて、妻が帰宅する時の彼女の姿は、「にこやかに手を振り、土曜の夜を思わせる様に形よく整えられ、彼への大きな忍耐と愛を示しているが、この彼女が結婚した棒のように静かな男には不要だった。」(p.84)とあり、彼が町で妻が駐車させる場所は特に人気のない奥であり、暴行、強姦などで危険だからと安全な場所をよく選ぶように注意しても、「大丈夫、平気よ。」と全く意に介さない。このように、妻は行動派の芯の強い女性と描写されている。自分の意思どおりに行動し、夫の手を借りずに、動き回る。夫が回復期にあっても、夫は静かに家にいて、療養に専念してくれればよく、妻は今まで通りのままで何も困らない状況である。彼女は以前と同様、颯爽として、爽やかであり、傷ついてはいない。また、友人たちが家に激励に来た日の場面では、妻の態度は、“slightly aggressive, argumentative, intimate, her long legs tucked under her, strangely feminine and persistent at the same time; she looked younger than thirty-four.”(p.96)と描写されている。若々しく、活力のある女性であることが、あちこちの描写から分かる。

He was in love with his wife but it was a condition he could not feel. From a close, intimate distance he admired her, this hurried, forgetful, busy woman, a very attractive woman whose striking face made her daughter withdraw out of shyness—a woman with the kind of face he had always admired from a distance, not hoping to win her. Yet he had won her. “He” had accomplished it, some fifteen years ago, but he could not remember how and he could not remember, though he tried desperately, the enormous joy that must have been his.... (p.84)

彼は事故後の妻がいると分かった状況から、徐々に記憶を少し取り戻し、妻との結婚の経緯を思い出す。彼女は美人で活動的で社交的であるが、夫の自分はまだめで、静かな努力家タイプであり、彼女を理想的な女性とってはいたが、自分とは性格も違い、結婚に到達するとは思ってもいなかった。最大の喜びであるはずの彼女を獲得する経緯を思い出せなかった。しかし、夫婦関係が描写される周辺状況から判断すると、ある種の彼女の打算・妥協や覚悟があったと想像される。つまり、彼女としては、他により理想とする相手、求婚してくれた相手がいたにしても、デービットのほうが職業柄、生活も安定し、より彼女の自由を認めてくれると判断したに違いない。彼はあまり細かなことを言わないし、自分を認めてくれて、束縛が少ないと考えただろうと暗示される。無論、直接彼女の言葉からは何も発せられない。彼の言動、感情の中にその喜び、嬉しさが感動と共に体験されているべきであるのに、今の彼の記憶の中には存在しない。これは本質的には、夫婦関係がじっくりいっていかず、あっさりと感じさせる。しかし、これは日常の結婚、家庭生活の中で忘れ去られて行ったものと理解される。事故後の彼の記憶回復の中で、妻がいたことがショックであり、さらに娘がいたことが一層ショックであった。そして、その時点で、未だショックを受けるものがありそうだと不安になる。記憶回復は喜びだけとは限らず、彼に不安、恐怖心も呼び起こす。

And so, back home, he lay upstairs in the handsome big bedroom, getting back his strength. Somewhere “his” strength existed, to be won back. He was resting. Convalescing. He could certainly remember this bedroom, but he had the idea he’d seen it in movie or in a photograph. While Elaine chattered to him in the sure, friendly, impersonal tone of a hospital nurse, nudging him back to health, he answered her in the way a husband might, recovering from terrible shock to his body and soul. But certain blackness in him could not escape her, could it?—was she pretending?

(pp.90-1)

このように、これまでの思い出された妻と現在の妻は変化がないどころか、何か不安を感じさせる存在である。妻の活発さ、旺盛な行動力の描写の後、彼女はこの病気の静かな男、夫を必要としないとデービットは感じる。

(p.84) これは、病気をして動けない男、夫というよりも既に事故以前からそのような状況であると推察される。彼女は自分の意思通り動く女性、夫の手を借りず自立した女性として描かれている。夫の事故後の回復期であっても、この状況は変わらず、むしろ家に居て、療養してくればそれで良いという冷ややかな状況と理解できる。これは彼女が病院の看護婦に譬えられていることから理解できよう。妻を、「病院の看護婦のように世話をしてくれるが、自信に満ちて、人間味のない口調」(p.91)と表現されている。また、妻を病院で初めて見た時、恥しそうにしているが、妻の性格、姿は犯罪者にして詐欺師のようであり、また、警戒すべき人物だと彼は本能的に感じている。(p.90) 自分の過去には「暗黒の年月」や「夫婦の暗い部分」があり、妻はそれらを見て見ぬふり(pretend)をしているのかと彼は疑問に思う。この“pretend”も夫婦関係の希薄さ、コミュニケーションの無さを象徴している。現在、妻は何か困った状況が起きたとは捉えていないし、何も傷つかず、これまで同様、爽やかで颯爽としている。事故後、彼は痩せて体重が減り、身長も低くなったと感じている。まるでもう一人の若い自分が彼女に求愛して、彼女を手に入れたようにさえ思ふ。自分は陰気で、弱気、彼女は元気で、陽気と対象的であり、彼は彼女が自分を陰気そうにじっと見つめていると思っている。やはり二人は相容れないものとして、またお互いにそう感じているように描写されている。

5. 妻の不貞と告白

事故の二日前にエレーンの不貞が突然発覚する。デービットにとっては、青天の霹靂であり、相当のショックを受ける。しかし、これが事故で途切れた後、彼が病院から家に帰った後の或る日、突然記憶が蘇るという形式をとる。一生懸命に自分を回復しようとするプロセスが妻の不倫を思い出すプロセスと重なる。それは、デービットが昼に書類を取りに自宅に戻ると、妻がいつもとは全く違う、高揚した輝く女性として帰宅するという状況だった。

She awakened him once. One morning, quite casually, he remembered a conversation he'd had with her a month or so before, before the accident. He had come home for some papers, just after lunch, and while looking through his desk drawers he'd glanced out to see her hurrying into the house. Her spring coat was unbuttoned, her hair a little blown, but her face was lustrous, radiant, a face

she no longer showed to him—and he had known, suddenly, that she was in love. He went downstairs. (pp. 91-2)

妻はこれまでにないように、この時は輝いて見えた。彼女は夫を見ると取り乱し、驚いた様子だったが、観念したのか、彼にコーヒーを勧め、‘she was so energetic, and nervous and happy that he dared not contradict her; so they sat in the kitchen and she told him.’ (p.92) とあるように、彼女の気丈さで他の夫、主人の友人への愛を告白した。名前は言えないが、夫のよく知っている、妻子ある男だという。愛しているので、離婚したいと言う。当然のことながら、この時の彼女も一層輝いて見える。

He had sat staring toward her, appalled and numb. She did not seem familiar to him. Her rapid, fluttery voice—her nervous hands, lighting a cigarette—her flushed cheeks and brilliant eyes that indicated how beautiful she was elsewhere, made beautiful by someone else’s existence—these things were a shock to him, the features of a stranger. She was a woman her could never win. (p.92)

とあるように、手の届かぬ花であった彼女との結婚前の二人の関係まで思い出してしまう。彼女が近くにいるだけで自分は満足を感じられる存在であったが、いつの間にかそれをすり抜けて抜け殻に満足を感じていた事になる。これは青天の霹靂であり、彼は呆然自失となる。

“I don’t feel anything,” he said. What was strange was that her disclosure seemed more than personal, more than private—it was like a door suddenly open to show him the unsettled landscape of the world, something beyond his control and indifferent to him, knowing no laws, opaque and mysterious and terrifying. (p.93)

そうしてこの二日後、デービットは交通事故を起こしてしまう。そして、家で徐々に記憶を取り戻してきて、この時の会話を思い出してしまったのだが、しかし一体彼女はこの「忘れ去られた会話」を思い出しているのか、彼が全てを思い出したことを知らないのか、彼女はもう覚えていないのかは不明である。いずれにしても、彼女は‘..., absolutely innocent in her own honesty.’ (p.93) であり、彼女は絶対に二度とこの問題には触れないと彼は確信している。妻の性格からしても、デービットの確信からしても、エレーンが自分から言うことはない。ここに微妙な、複雑な人間の心理が表出している。エレーンにすれば、触れては不利な状況にあり、自分から無理

に触れる必要はない。彼にすれば、自分の立場は極めて微妙であり、これから妻の介護、助けにすがる必要がある。ここで悶着を起こし、離婚などというこれ以上の混乱、問題を二人とも望んではない。この二人の心理は直接物語の対話で述べられているものではなく、読者が物語の描写、状況から読み取るものである。これまでの妻の態度に対する描写と回復期の夫の態度からそのように判断される。デービットが最後に妻に懇願する場面にはこれまでのことは何も問わないという二人の暗黙の了解が集約されている。デービットの願いには妻の助けが必要であり、このまま夫婦関係を保っていきたいという願望が託されている。エレーンにはそれに応えていこうとしている。このバランスさえ取れば、これまで通りほとんど不変の生活が維持できる。夫を助け、甲斐甲斐しく介護している状況を維持するほうが、自分も世間体や良く、周囲から良くやっている妻と評価されよう。夫の人柄、誠実さからして、二度とあの話を夫が口にして事を荒立てることはないというエレーンは確信をもっている。妻としては、夫に忘れて欲しい、思い出して欲しくない問題だと思っている状況が読み取れる。

6. 象徴的な語—アンケート、タペストリーなど

最後に、ストーリーに現れる幾つかの象徴的な語句を解釈し、この物語の問題点の解釈の一助としよう。ストーリーが時系列で展開しているのではなく、夫デービット、つまり患者が事故後、家庭生活をしながら、記憶を辿る過程を一つの軸として、そこで思い出された過去の現実を展開させていくという手法を取っている。そして、徐々に夫、夫婦の今現在と遮断された過去が結びついていく過程を描いている。当然、既に起こっている現実とゆくゆくは繋がることになる。つづれ織り (tapestry) という言葉が、この或る日の庭にいる時と既に引用した事故の場面に現れる。事故では、2台の車がある運命によってX地点で一つになる如く、夫は定かでない自分の記憶もいつかは運命の日を迎えるだろうと思う。

He was being drawn back into life like a minor thread, drawn into a complicated tapestry of vivid, major colors, a tapestry that would tolerate him. He admired the tapestry and he feared for his own destiny in it, that thin thread, a slowly strengthening thread that might come to some destination... (p.84)

この「つづれ織り」により、結ばれる運命と解体される運命、そしてその不安とを表現している。デービットは或る運命に辿り着く、ゆっくりと織られた糸を恐れ、また全体を包む一つの絵を恐れている。それがどのようなもの分からないので、不安や恐怖を感じている。また、ストーリーの冒頭のアンケートを取りに訪れる男女の場面でも、デービットが興味を持って答えた結論を聞くと、

「このようなアンケートは聞くだけで、私のような者は結論を出しません。」(p.82.) という。彼は、せめて、normal や convincing という言葉を言ってもらいたかったのだ。個々の事実は断片的には存在するが、全体、相対としての展望、結論は存在しない。このアンケートは結論や結果のないことを象徴していて、彼自身の identity の欠如、そして夫婦関係の結果を暗示している。彼は座標軸を失い、不安の中にいる。記憶の回復には他人の手を借りつつ、それをヒントに自分で回復していく。暗闇の中を手さぐりで、自分を探していく。そして、それが本当に事故前の自分に辿り着くのか、着いたのかという不安も更に生まれる。回復とは元の状況に戻ること、復帰することであり、この夫婦の場合は問題は解決されず、封印となり、持ち越される。永遠に、凍結される状況にある。その意味では、この夫婦関係には冷たい、深い不安、恐怖が漂っている。毎日、二人がお互いに問題の蓋を開けないように注意して、静か生活して生きて行く以外にない運命である。

7. 友人たちとの会話

物語の最終場面での夫婦の姿は、お互いに意識するとしないに関わらず、夫婦のまま助け合って行こうという暗黙の了解の下で決着する。自宅でのテイラー夫妻との会話中、デービットは友人テイラーがエレーンの手を取って口付けし、親しげに言う様を見て、突然エレーンが告白した「名の言えない親しい友人」のことを思い出す。元々、彼は話について行けず、ホストとして話を盛り上げられない自分が落ち込んでいたところに、あるいはテイラーかとショックを受けキッチンに行く。そこでいろいろと道具を眺めながら、思い出に耽る。たくさんの古い調味料のビンや栓抜きなどは昔妻が家庭内のいろいろなものに興味を持って頑張っていた頃を思い出させる。その後は、妻が次第に内から外へと活動の場を広げていったのだった。それらを見ていたら、デービットは気持ちが高揚して来て、気が狂いそうになる。そして、無意識に一つの古い栓抜きを手に取り、試しに親指に、そして手首に当てる。その鋭さで彼は次のように感じる。

For all his life he had been certain of himself, beginning with his name; nothing had escaped him. And yet everything had escaped him. He had felt certain emotions—love and hate—and had been swept along in violence by these emotions, purified by them like his wife Elaine, justified by them as the assassin of Kennedy and the assassins of other men are justified by emotions. The emotions faded, the events could not be remembered—and where, in such a puzzle, was fixed point? (p.100.)

ここには、愛と憎しみ、愛と暴力が象徴されている。そして、彼はそれら全てが暴力的に押し流され、エレーン

のように浄化されると感じる。彼は「この何気ない栓抜きがそれ自体、魂を持ち、定まった、測定可能な重力の中心を持っているのだろうか。」と自問する。彼自身が自分を失っている心境をこのように感じる。この少し前には、このキッチンで、自分の体は麻痺し、identity を失ったと言う。妻の不倫のことも思い出し、昔の各種の栓抜きや以前妻が凝った各種の調味料などが以前の妻、或いは昔の良き日の家庭を象徴しているとも言え、この落差に気が動揺し、彼は興奮し顔に汗をかく。短い間ではあったとしても、妻も家庭、家事に勤しんだ時があったのだと感じる。そして、彼女はこの内なる世界から混沌とした外の世界へ飛び出して行ったと言えよう。デービットは妻の告白の直後もほとんど自分というものを失いかけているので、事故を含め二度も自己喪失に陥っていることになる。この呆然自失の時、台所にエレーンが入って来て、この彼の姿を見て動揺し、思いつめないでと言う。彼は、必死に「私を1人にしないで。置いて行かないでくれ。」と懇願すると、妻はそうしないことを誓う。彼は少し気を取り戻して、既に述べたような印象を持ちながら、これまでのことは忘れ去られるだろうし、多分妻は不貞を犯していなかったかも知れないし、すべて自分の想像だったかも知れないという漠然とした思いで終わる。これは夫デービットの最終的な思い、結論である。妻の恋の発覚前の良き日々と思われた夫婦関係もある意味では同じ、ある漠然とした関係であったであろう。妻にはあまり詮索せず、任せ、見守っていく関係に戻るのに等しい結論である。お互いの弱さを隠すために、また守るために、あの不幸な出来事を封印しなければならぬ運命を受け入れる。

8. 表現技法について

この物語は日常性に潜む恐怖、悲哀、不信を描写している。そして、ストーリーの問題点、転機は妻の不倫と交通事故である。どちらかといえば、交通事故による重症と記憶喪失からの回復が主体で、その中で、妻の不倫を思い出すか、或いは完全には忘れていないという問題が起こる。この二本の線が交錯し、これがこの物語に妻と夫との間の緊張感、不安感、不信を生み出していて効果的である。妻にとっては、この不倫の問題はないに等しい振る舞いである。その理由は、自分から触れたり、確かめたりする必要がないからである。不倫の発覚は夫の交通事故の原因になったかもしれない問題である。夫が一言、その事を考えていて運転を誤ったと言え、全て妻の責任ともなり得る。妻にとっては、寝た子を起こす必要はない。そして、退院後の現在は、夫は妻の存在、助けを必要としている。それを妻は十分理解しているはずである。最後の場面で、夫が目潤ませて、妻に一人にしないでくれと懇願するが、これは妻にとっては自分が必要とされているという回答であり、これで妻の立場、存在意義は成立する。甲斐甲斐しく、これまでと同様夫に付き添い、夫を看護すれば、表面的な内なる夫婦関係

と外から見た世間体もバランスよく釣り合い、安泰である。

しかし、この短編作品の全体を通して流れる冷たい夫婦関係、その不信はこのような外見では解決はしない。この作品では、これまでも、また今後共、真の意味でお互いに助け合って生きていくようには想像できない。お互いの傷には触れず、その残った部分で、妥協して行こうとする人生である。作品全体を通ず、不信、不安、恐怖の通奏低音は消えない。G. Johnson はこの短編集の他の作品を評して、現実世界を‘social and psychological context’で描写し、‘The story unites psychological realism and gothic horror which are Oates’s most characteristic and effective fictional modes.’ (p.99) と述べている。³

9. 結論

これまで結婚前の様子、交通事故、夫婦関係、不貞の発覚、回復期の自宅の様子などを見てきたが、この二人の夫婦の関係は全てにおいて不変と言える。お互いの立場は変わらない。妻の浮気と離婚の話、事故後の夫から妻への哀願という表面上僅かな変化が見られたが、結果として何も大きな進展、結論は見られない。日々、目前の問題だけを上手く処理し、大きな問題は先送り、触れなくておくという方法を取ったに過ぎない。無論、作者オーツ自身のこれまでの作風からして、オーツの作品には雨降って地固まる式のハッピーエンドはほとんどあり得ない。人生の一断面、ある日、ある場面そのものを一番効果的な方法で描写するのみである。人生はこれら諸々のものを包含して進んでいく、流れて行くものだというのであろう。

オーツは何か特異な夫婦、家庭を描こうとしているのではなく、どこにでもありそうな日常生活、家庭風景を取り上げ、そこには必ずや人生の悲哀がある、誰にでもそのようなものがあることをいろいろな語り口、手法、技法を駆使して描写している。Waller はオーツの作品を批評して、初期の荒地から出た後は、超越的、宗教的であるというよりはむしろ、根源的、精神的な葛藤を示し、結末は不安げで、曖昧である。また、明確な即物的事象が人間劇の苦悩や緊張感を高めていて、オーツの作風・技法を D.H. ローレンスの“setting and character”の技法との類似性を指摘しているのは示唆的である。⁴ この指摘は最終的にこの短編集の全24作品を概観する上で参考になり、一つの座標軸となろう。

Johnson はこの短編集 *The Wheel* 全体を批評して、「愛の神秘は依然としてオーツの関心事であるが、しばしば見当違いで、自己欺瞞の愛が歯車の上で崩壊してしまう愛から、希望や超越を与える本当の人間の絆を確かめる愛まで広範囲に描写している。」(p.115)と述べている。その中では、この「回復期」という作品は、「見当違いで、自己欺瞞」の愛の典型で、恐怖を効果的に醸し出し、崩壊した愛、希望の無い、冷たい夫婦関係を描いた作品と

言える。これまでも、また今後も長く pretend、つまり演技をする、装うことを続けなければならない夫婦の姿、その運命を描いている。

注)

1. 拙論「オーツの *The Wheel of Love* 研究 (Ⅲ)」
(『都立高専研究報告』、第 39 号、2003) pp. 127-38. を参照。
2. Joyce Carol Oates, *The Wheel of Love* (Vanguard, 1970). 以後、本文中のテキストからの引用は全て括弧にページ数で示す。
3. Greg Johnson, *Understanding Joyce Carol Oates* (South Carolina, 1987), p.99. “Where Are Going” の誘惑に関して、“psychological realism and gothic horror” への言及が見られる。
4. G.F. Waller, *Dreaming America—Obsession and Transcendence in the Fiction of Joyce Carol Oates*, pp.71-5. (Louisiana State U.P. 1979)